

去年の十月二十日、台風が近づいていました。でも、ぼくはそんなにひどくならない、いつもの台風だと思っ、ていました。ところか、夕方にひなんかんこくが出されてから様子が変わりました。その夜、ぼくたち家族は近くの工場の二階に入れてもらい、そこでねました。

次の朝、外の景色は夢であ、てほしいと思、うぐらい変わ、ていました。堤防が決かいした小坂は、一面海でした。

ぼくの家は大丈夫だろうかという気持ちのまま、三日間ほど近づけずにいきました。そして、水が引き、家に入、た時、ぼくは大きなショックを受けました。くつばこが倒れていて玄関からの出入りはおずかしく、家の中は泥だらけ家具は全て倒れていました。ぼくが集めていた物も全部どろどろでした。学校は二週間は町内のし設でねとまりしい学校にはバスで通いました。二週間後からはアパートに入りました。いつもよりきつい部屋での

生活が始まりました。

ぼくは、大好きだったテレビゲームもやらなくなりました。とてもできませんでした。お父さん、お母さん、家族みんなが一生懸命でした。そして、冬をこえ春になったとき、もとの家に帰える事ができました。

泥だらけの家になっ、てしまっ、たあの台風、ぼくの大事な物もたくさん捨てなければなりませんでした。忘れたいことはたくさんあるけど、良かったこともあります。被災してか

ら、ぼくの家族は前以上に団結するようになりました。つらいことがあ、たから、家族のありがたさがか、たと思ひます。そして、たくさんのボランティアの方々、あの人たちのやさしさは絶対に忘れません。ぼくが大きくな、たとき、あの人たちのような、人の役に立、てる大人になりたいと思、えたのはあの経験があ、たからです。そんなことを教えてくれたあの人たちにありが、とうともう一度言ひたいです。